藤枝文藝

藤楓文藝

昭和四十五年三月十五日　印刷
昭和四十五年三月二十日　発行

藤楓文芸　第2刊【非売品】

編者　財団法人　藤楓協会
発行者　財団法人　藤楓協会
東京都千代田区内幸町一－三－五　〒一〇〇
新栄ビル　三階
電話東京（〇三）五〇一－一二三九番（代表）

制作　有限会社　教文堂グラフィック

印刷・有限会社　教文堂
製本・有限会社　真光社

複製不許

藤楓文芸の発刊にあたって

財団法人 藤楓協会理事長
聖 成 稔

およそ人としてこの世に生をうけて何よりも幸福であることは健康に恵まれることにあるのはいうまでもない。

数多い病気のなかにあってらいにかかった人ほどお気の毒な方はない。

自らの不注意でもなく思いがけないくらい菌の感染をうけて発病し学業、職業をすて、肉親とも離別し、しかも生れ故郷を遠く離れて療養所に二十年、三十年さらにそれ以上の長期にわたり療養生活を送らざるを得ない運命をたどられた方がたの不幸に私はいつも心からの同情を禁じえないのである。

しかし、一度療養所を訪れてこの方がたにお会いした人は必ずや意外に元気で明るいしかも旺

盛な生活意慾に燃えておられる姿に接し、一驚されるに相違ない。

発病当初はその不幸な運命のために、悲嘆に明け暮れ懊悩の日びを長きにわたって送られたことは想像に難くない。しかし、その不幸のどん底から、やがて力強く生きる道を悟られ起ちあがった結果がこのような姿になって現れていると思うとき、私は療友の人びとに心から頭のさがる思いがするのである。

つれづれの療養生活において人びとはその才能や特技を生かされあるいは書道絵画等に精進されあるいは詩歌俳句等に興ぜられ、いまや、いわゆる素人の域を脱せられた方がたも、決して少くない有様である。

全国の療養所において黙々としてそのような日びを送りつつ創作された優秀な作品を広く世に紹介してらいを正しく理解していただくためのよすがとする一方、療養者と社会との交流の一助となすことこそ藤楓協会の大切な使命と思うのである。

昭和四十二年以来毎年三越の非常なご協力をいただいて、書道、絵画、写真、盆栽、手芸品、工作品の展示会を開催し療友はもちろん、一般参観者の方がたの深いご賛同をいただいているのであるが昨年始めて詩、短歌、俳句、川柳等の文芸作品を広く全療養所の同好の人びとから募集しそれぞれわが国最高権威の方がたにお願いして選をしていただきこの藤楓文芸を発刊したとこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ろ各方面から療養者の方がたの生なましい生活に触れることができ、大変認識を改めたというご好評をいただいたのでその第2刊を発行することにした。

一人でも多くの方がたに愛読していただき、この文芸作品を通じて療養所の皆さんの生活を偲んでいただくとともに、らいについての正しい知識を得ていただくことができれば幸である。

なお巻末に記載したらいを正しく理解するために是非ご一読をくださるようお願いして発刊のご挨拶とする。

療養文芸作品募集要領

○目　的

入所者の作品を通じて、療養生活のさまざまの姿を社会に伝え、らいに対する正しい認識を訴え、入所者と一般社会との心の交流を一層緊密にすることを目的とします。

○募集文芸作品の種類

「詩」「短歌」「俳句」「川柳」（各雑詠）「随筆」

○応募作品の選者

詩　村野四郎氏
短歌　木俣修氏
俳句　加藤楸邨氏
川柳　長谷川霜鳥氏
随筆　石垣純二氏

○掲載する作品

右の各選者によって応募作品を選考し、優秀なるものを掲載することといたします。

○応募の方法

詩、随筆は一人一篇、短歌、俳句、川柳は一人五首又は五句までとし、未発表のものであること。

○応募の書式

一、所属療養所名

二、氏　名（ふりがなを付すること）雅号を書き添えても構いません。

三、年　齢

四、文字は必ず楷書にてはっきり書くこと。

○送付方法及び送付先

応募作品は各療養所において、各種目別（詩、短歌、俳句、川柳、随筆）にとりまとめ、一括して藤楓協会宛に送付すること。

藤楓文芸　第2刊　目次

序　財団法人藤楓協会理事長　聖成稔……一
療養文芸募集要領……四
詩　村野四郎選……九
短歌　木俣修選……五一
俳句　加藤楸邨選……七七
川柳　長谷川霜烏選……一〇一
随筆　石垣純二選……一三三
藤楓協会とは……一五四
らいを正しく理解するために……一五七
らい療養所所在地及在所者数……一六一

題字　倉永圓清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩

村野四郎選

特選

ある告白夢

わたしはやどかり
わたしは砂の世界に住んでいる

わたしには家がない
捨てられた標札はむなしく
砂をかぶり
遠い日の記憶のなかに眠っている

〈邑　久〉　しもだ・よしお

わたしには生を証すための
ことばがない
だから　風は対話にとまどい
ひらりと振り返っては去ってゆく

わたしには道がない
わたしの旅は
いつも自分自身の影の中をさまよい
決して彼方の場所へ至ることがない

わたしは自分の世界の
標識をたてるための道具を持たない
満月の夜

砂の塔をたてておいたが・明くる日の
太陽の光では跡かたもなかった

縋りようのない望みよ
目の内部で把えたものは、漂う雲の
変化の誘いに正体を晦ましてしまう

目のなかのものは重い
けれどもほんとうのものは
もっと深いところにあるのだろうか
とじられた影の世界よ
その扉が軋り
こころが足音をたてるとき　空から

ほんとうのことばがおちてくるという
所在は問われるためにあり
生命は
ただ問うためにのみ歩くという

わたしはやどかり
わたしには運ぶものが何もない
うつろな空気を背中に浴びながら
それでもわたしは生きようとする
道の所在を問う耳よ
空の物音に飢えた生命は　ただ
歩くために歩いている
それは　砂の上に投げられて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c